

温故知新

其の二

時代は、擦文文化から
オホーツク文化を経てアイヌ文化へ

擦文文化期

擦文式土器片

採集場所

浜猿払遺跡

特徴

他の土器と比べ、明らかに器面の文様が異なります。



オホーツク式土器片

採集場所

浜猿払地区

特徴

クリーニングの上で同定されたオホーツク式の特徴がわかる土器片です。オホーツク式土器の特徴の一つである、粘土紐の貼付文（ソーメン文）が壺型の土器の側面に施されています。



アイヌ文化期



▲ 随行絵図師 谷口青山による猿払川沿岸写生図
(猿払川河口周辺)

一行は、猿払川を渡り、近くのアイヌの家に一泊し、翌日、浜頓別方面へ向かつたことが写生画に記載されています。チエトマヘ（杖苦内＝現在の東浦）から、エサヌカ付近までの海岸線の写生図には、豊かな森に囲まれたアイヌの家が描かれています。この写生図に描かれた、どこかの家に彼らは泊まつたと思われます。

アイヌ文化期になると、土器製品から漆器・鉄製品へと変化が起ります。幕府役人 田草川伝次郎の「西蝦夷日記」には、文化4年（1807年）当時の、サルフツのアイヌ人口を11軒、男女54人とし、地域の有力者（乙名）として、チウトラアイノ、カテレバアイノの2人の名が記されています。

また、寛政10年（1798年）に、幕府役人 三橋藤右衛門らが宗谷地方を巡回した際に、随行した絵図師 谷口青山が描いた写生図が函館市中央図書館に現存し、そこには、現在の東浦から浜猿払・エサヌカ付近までの海岸風景も含まれていることから、写生図の複製を提供いただきました。

アイヌ文化期になると、土器製品から漆器・鉄製品へと変化が起ります。幕府役人 田草川伝次郎の「西蝦夷日記」には、文化4年（1807年）当時の、サルフツのアイヌ人口を11軒、男女54人とし、地域の有力者（乙名）として、チウトラアイノ、カテレバアイノの2人の名が記されています。

また、寛政10年（1798年）に、幕府役人 三橋藤右衛門らが宗谷地方を巡回した際に、随行した絵図師 谷口青山が描いた写生図が函館市中央図書館に現存し、そこには、現在の東浦から浜猿払・エサヌカ付近までの海岸風景も含まれていることから、写生図の複製を提供いただきました。



刀

国道の改修工事の際に出土した刀。海岸付近で暮らしていたアイヌの方が大切にしていたものかもしれません。鋸びついて原型をとどめていますが、大小の鉄片から想像すると、刃渡り30cmほどと思われます。



鍔

アイヌ文化期を知る遺物として、国道238号線シネシンコ地区の国道改修工事の際に出土した「刀」があります。刃は鋸びていますが、オホーツク管内の常呂で出土したものと酷似し、鍔（つば）には鮮やかな模様も施されています。アイヌの人々にとって「刀」は単なる武器ではなく、靈力のある宝器でもあり、大切に扱われていたと思われます。

鍔（つば）は、当時、高価なものであったため、形を似せて石で作ったりもしていました。この鍔は、常呂で出土したものと極めてよく似ているものです。高価な鍔を購入するために、どれほど対価（物）が必要だったのでしょうか。

オホーツク文化期

この時代に使用された土器「擦文式土器」は、本州の素焼きの土器「土師器（はじき）」を真似た技法で製作され、これまでの縄文が消え、土器の表面を木のヘラ状のもので擦り、線で模様を描く手法に変わりました。縄文土器も下の擦文式土器もそうですが、彼らは、成形した土器を抱え、丹念に模様を描いていたのでしょう。現代のように情報があふれていたわけではない中で、どんな思いを込めて創作していたのか興味をひかれます。

日本（本州）が、飛鳥時代から鎌倉時代にあたる7世紀～13世紀頃、北海道から東北北部、サハリン南部、千島列島南部まで「擦文文化」が広がりました。

この時代に使用された土器「擦文式土器」は、本州の素焼きの土器「土師器（はじき）」を真似た技法で製作され、これまでの縄文が消え、土器の表面を木のヘラ状のもので擦り、線で模様を描く手法に変わりました。縄文土器も下の擦文式土器もそうですが、彼らは、成形した土器を抱え、丹念に模様を描いていたのでしょう。現代のように情報があふれていたわけではない中で、どんな思いを込めて創作していたのか興味をひかれます。

「幻の海洋民族 オホーツク人」が、猿払の前浜を舞台に、果敢にアザラシを追う姿を想像するだけでもワクワクした気分になります。「オホーツク人」のルーツは明確ではなく、アイヌ民族説・ニブヒ説・アムール川下流域民族説など諸説入り乱れる中に、すでに消滅した民族集団との説もあります。彼らは、どこからやってきて、どこへ行つたのでしょうか。

続縄文文化期、擦文文化期と並行して、サハリン南部からオホーツク海沿岸を中心としたのが「オホーツク文化」と言われています。北海道は、縄文文化以降、本州と異なる文化の歩み方をしましたが、その北海道の中でも猿払村を含むオホーツク海沿岸地域には、また別の特異な文化が栄えたことは、北方地域との交流を物語るものと考えられます。この文化を伝えたオホーツク人は、「幻の海洋民族」とも呼ばれ、アザラシなどの海獣の狩猟と、漁労を中心とした「海の文化」であったと考えられ、擦文文化の影響が強まる中で消滅したとされています。

「幻の海洋民族 オホーツク人」が、猿払の前浜を舞台に、果敢にアザラシを追う姿を想像するだけでもワクワクした気分になります。「オホーツク人」のルーツは明確ではなく、アイヌ民族説・ニブヒ説・アムール川下流域民族説など諸説入り乱れる中に、すでに消滅した民族集団との説もあります。彼らは、どこからやってきて、どこへ行つたのでしょうか。

擦文文化期

▼

オホーツク文化期

▼

アイヌ文化期

次号は、「厳しい開拓時代」を中心とした資料の紹介をし、以後、林業や漁業などの産業資料、戦争資料、商業や日常生活、教育などについてテーマを設けながら紹介する予定です。

また、準備中の資料館について、公開時期が決まりましたら、回覧等でお知らせを致しますが、ある方は、職員の作業中でもお気軽に立ち寄りください。